あおい通信 第90号

第90号 平成24年11月1日
リハビリテーション
デイサービス葵・編集委員会
練馬区東大泉3－17－5
カトウビル3F
電話 03－3978－0919

東京江戸散歩

その四十八 雑司ヶ谷 ⑤

写真・文 七海邦夫

●**新江戸川公園**・この辺りは江戸時代の末期、熊本藩主細川家の下屋敷が有ったところ。昔日の面影を伝える庭園は起伏に富んだ地形を利用した回遊式泉水庭園。神田川の河岸段丘の台地を山とし、湧水を作り、鑓水で池に導き、流れに沿って野草をあしらい、池のほとりを巡る遊歩道を設けている。台地の上を行く小径は深川幽谷を思わせ、さまざまな角度から趣の異なる池の景観を楽しめる。一帯は明治以降も細川家の邸宅となっていたため、ゆかりの建物も残っている。池のほとりに建つ建物は松声園といって、現在は集会場として利用しているが、明治二十年（一八八七）に細川家勉強所として建てられたものだ。庭園は昭和二十四年に東京都で買収、現在は文京区立の公園になって一般公開されている。園内ではカルガモやカワセミなど野鳥の姿も見かける。

●**関口芭蕉庵**・神田川は神田上水とも呼ばれ、江戸の住民の飲み水であった。この川は吉祥寺の井の頭池（現在の井の頭公園）を水源として、江戸の市中に流れていた。江戸の町はその多くが海岸の埋立地で良質の井戸が得られない為、川の水は貴重な水源だった。因みに水源地の井の頭池は、江戸の井戸の源流、という意味。芭蕉庵の近くにある水神社は、神田上水の守り神とされた。芭蕉庵から江戸川橋方面へ少し行った江戸川公園の一角に神田上水大堰がある。神田上水の取水口で、この場所で水の多くが上水用に取り込まれて小石川からお茶の水方面へながれていき、神田川を掛樋で越えて江戸城へ、更に小石川、神田、柳原、京橋、江戸橋など各地へ町方へ、地下に埋設された木製の水道管（木樋）によって給水されていた。取水されなかった水は神田川として飯田橋方面へ流れていき、御城外堀へ注いでいた。この神田上水の修復工事が延宝五延宝五年（一六七七）から四年ほどかけて行われた。俳人として知られる松尾芭蕉は、この時神田上水の修復工事に関わっていた。要はアルバイトをしていたのだ。と言っても肉体労働をしていたのではなく、工事進行状況などを記録すると言う事務職だったらしい。その為に芭蕉が暮らした場所とされているのが此処である。芭蕉はここからの眺めを「五月雨にかくれぬものや瀬田の橋」の句に詠んでいる。関口芭蕉庵は、芭蕉の死後、芭蕉を慕う人々によって建てられたもの。敷地内の芭蕉堂には享保十一年（一七二〇）、芭蕉の三十三回忌に安置された芭蕉木造がある。芭蕉像としては最も古い物のひとつと言う。

●**永青文庫**・胸突坂上の左に、細川家伝来の資料や文化財を集めた永青文庫がある。細川家は足利将軍の重臣の家柄。細川忠興は織田信長の傘下の武将となり、明智光秀の三女（ガラシャ夫人）と結婚し、のちに子孫は肥後（熊本）の城主となった。

●**芭蕉園**・明治期に「目白御殿」と称された、台湾檜や屋久杉を使った豪壮な邸宅。明治一〇年（一八七七）に宮内大臣田中光顕がここに屋敷を構えた。大正八年（一九一九）に渡邊銀行の渡邊治左衛門が買い、昭和七年（一九三二）に講談社社主、野間清治に渡った。現在は講談社野間記念館として一般に公開されている。訪れた時は「川合玉堂とその一門会」展が、今は十月二十七日から十二月十六日まで「横山大観と再興院展の仲間たち」展が開かれている。これは是非見たいものだ。

（続く）

世評・時評

原発の再稼働について…国、政府、電力会社のどこが判断を下すのか、議論が水掛け論に終始している。安全性にリスクがあるから及び腰になるが、三者ともに本音は再稼働させたくないようだから始末が悪い。

「ない」と強弁してきた原発事故が福島で現実に起こり、多くの被害者に対する補償問題が発生した事が問題の根底にある。今後、原発事故が起きるリスクをどのように判断し、現実問題としてどこまで補償をなし得るか、明確にする必要性が否応なしに生じたのだ。

これを決めずに再開するのは国民として認める訳にはいかない。深刻な事故による賠償金を国が無制限にリスクを負えるはずもない。膨大なリスクと賠償責任の形を曖昧にしたまま今回の事故に至ったが、もはや従前と同じ処理は出来ない。大事なのは原発「再稼働の判断」などではなく、安全基準が強化されてもなお起き得る原発事故をリスクとしてどう捉えるかであろう。

被災された方々には健康に気をつけて、一つ一つ前向きに生きて行かれる事を願ってやまない。

「竹島、尖閣諸島」領土をめぐる問題…日中、日韓関係の緊張。特に日中関係では、国交正常化四十年という記念の年にもかかわらず文化交流の行事が次々と中止された。経済、文化、両国民の往来までもが妨げられている。国民感情を昂らせる情報がネットを通して瞬時に流れる昨今、領土問題では愛国主義にたやすく火がつく。

中国の各地での反日デモは国民感情の爆発であり、デモの暴力的行為や中国政府の強硬な発言に日本の世論も対中感情を悪化させている。

両国とも政権交代期にあり、強硬な世論が政治に与える影響は大きくなっている。特に新聞やテレビの報道は目に余る。

（K・ドラゴン）

◆**編集委員会よりお願いです**

「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。担当飯島迄お申し出ください。

利用者さんの紹介コーナー

伊坂　好三（日）

今年で八十歳になります。家内が入院三年目に入り、毎日、病院通いの日々です。ひとり暮らしも、長くなりました。

西尾　千代子（火、土）

趣味は和裁、洋裁、編み物、水墨画といろいろです。そして短歌は十年やっていました。

『ワイン注ぎ　合わすガラスの音かすか　いづれ一人となりゆく二人』

知名　鈴子（火）

山口から東京に出できました。テレビで水戸黄門など時代劇を見るのがすきです。何もない日は、散歩をかかしません。

寄り添う

大沼　孝子

私はパーキンソン病を発症して二十二年目になる。その間、いろいろな励ましを受けてきた。

「大丈夫ですか？」という温かい言葉も随分かけてもらった。もちろん冷ややかな視線も同じ位浴びてきた。

この年月の間に、わたしは寄り添ってもらうことの心地良さにすっかり慣れ切ってしまったが、果たして私自身は周りの人達に寄り添ったことがあっただろうか？

最近の私は、パーキンソン病の進行と腰椎分離症の悪化で、脚の痺れがひどく、思うように歩けない。そんな私を娘や息子は気遣って、一緒に出掛ける時は必ず腕を貸してくれたり、手を貸してくれたり、手をつないだりしてくれる。二十二年前も、こうやって息子や娘と手をつないで歩いた。あの頃の子供達の手は、私の手にすっぽり入る小さだったのに、今では私の手を包み込む大きな手になって私を支えてくれる。

二十二年は長いようで、あっという間でもあった。その中で培ってきたものが何かしらあるはずだと、この頃思う。それは人の痛みをわが身の痛みとして感じる心かもしれない。あるいはじっと耐える我慢強さかもしれない。あるいはウツとの闘いかもしれない。

とにかく、他人には知り得ないいろいろなものが私の中に蓄積されている気がする。それを携えて同じパーキンソン病を患う人々に、さらに病気で苦しむ人々に寄り添って生きていけないだろうか？

私でも何か役立てることがあるはずだ。

妻を恋ふるの記

大内田　日出人

私は近頃よく「男の祈り」という歌を歌う。村田英雄の亡妻を偲んだ歌である。その第二節は「愚痴の一つもこぼせずに、俺を支えて四十と余年」で始まる。

私は今年の五月、六十二年連れ添った妻に先立たれた。そこで私の場合は「俺を支えて六十余年」となる。以前このあおい通信に「妻と恩人に助けられた私の人生」という小文を書いたが、今度はその続きの形で「妻を恋ふるの記」を書く。

妻は、私が旧制高校生のときに高吟した「妻を娶らば才たけて　見目麗しく情けあり」の歌詞そのまのような人であったように思う。誰からも好かれる明るい性格の人であった。

人の一生は、あざなえる縄の如く禍福が交互にやってくると言うが、妻にとっては私の入院が禍であり、福は舞台で歌っている時と、旅行を楽しんでいた時であったように思える。夫婦での旅行は二十数回あるが、その半分は海外旅行である。妻は友人や娘達とも国内・外国と数多くの旅行をしている。以前の小文と重複する所もあるが、妻の禍福を辿りながら思い出を偲んでみたい。

私の最初の入院は、昭和三十四年二月から翌年八月までの一年六ヶ月の長期であった。当時は給料も少なく、子供も幼く、精神面・経済面・先行きの不安で、妻の苦労は並大抵ではなかったと思う。それでも愚痴も云わず、頑張って良く耐え良く支えてくれた。今、思い返しても、唯々頭が下がり感謝あるのみである。

更には四十八年には交通事故、五十一年正月には腸閉塞、平成になっても一昨年、昨年と肺炎で入院し、妻は今度は駄目だろうと、葬式の準備をする程の心配をしたようである。それでも私は元気になった。私のこうした入院の繰返しへの反動でもあったのか、妻はカラオケに熱心で師範の資格をとる位、上手になり、優勝トロフィーが二十数本もある。二人で「絆」という歌をデュエットした時の事が、今でも懐かしく思い出される。

妻のもう一つの福、旅行についての思い出を少し辿ってみたい。タイではパラシューターで空を飛び、象に乗ってはしゃいだ。インドネシアではバリ島の踊りや、ボロブドールの遺跡を見物。スペインではフラメンコ、リヤドの美術館見物。フランスのルーブル美術館、ベルサイユ宮殿の見学や、パリ郊外の古城巡り。イタリアではポンペイの遺跡やベニスの運河巡り。カナダでの船に乗ってのナイヤガラ瀑布やカナディアンロッキーの大氷河の壮観。中国での万里の長城や香港の夜景等々、妻との思い出が走馬燈のように巡ってくる。葵の迎えの車を、手を振って見送ってくれた妻の姿は今は幻である。

古いアルバムめくり涙そうそう、幻の影を慕っての秋の夜長。「男の祈り」の三節は、川の流れをせきとめたとて人の定めはこの手に負えぬと続く。生者必滅・会者定離、と言うが、それでも別れは辛い。近作の俳句三つ。

信濃路や妻の思出　蕎麦の里

竜胆（りんどう）や妻の好みし濃紫

初物と妻好物の柿供え

雑学

絹田　治夫

今回は旧暦の季節を二十四等分【にじゅうしせつき】を記述します。

一月【小寒】新年を迎えての、寒の入り。一年の健康は年の初めから、皆さんも身体には十分気を付けて下さい。【大寒】一年中で寒さが最も厳しい頃。冷え対策を万全にいたしましょう。

二月【立春】暦の上では春です。寒さもあと少し頑張って下さい。【雨水】雪が雨に変わる頃。体調管理が難しい時期。

三月【啓蟄（けいちつ）】冬ごもりの虫も目覚める頃。体力をつけて春を待ちましょう。【春分】昼夜の長さが同じになる春分の日。春はそこまできています。明るく元気で前向きに。

四月【清明】万物が清々しい時期。体の調子も爽やかに。【穀雨（こくう）】穀物を育てる雨が降る頃身体も滋養したい時期。

五月【立春】暦の上では夏です。早めに暑さ対策を。【小満】草木が茂り始める頃。

六月【芒種（ぼうしゅ）】芒（のぎ）を持つ穀物の種を蒔く時期です。【夏至】昼が最も長くなる日。

七月【小暑】そろそろ暑さが本格的になり始める頃、元気で丈夫に過ごす体力を。

八月【立秋】暦の上では秋ですが、まだ夏本番皆さん胃腸は弱っていませんか。【処暑】暦の上では暑さが落ち着くころです。美味しい物を食べて元気で頑張りましょう。

「次号に続く」

あおい俳壇

相田　美代子

秋風にゆられて香る　秋海棠（しゅうかいどう）

垣根より葵の花の香かな

葵友の会　広報コーナー

10月度行事の結果

グルメの会

芝の高級料亭「うかい亭」にて。20名もの参加でした！

カラオケ会

19日（金）バンバンにて。16名の参加。

11月度行事の予定

旅行の会

草津・白根・軽井沢に2泊3日で行きます。温泉三昧だな～。4日に出発。

カラオケ会

16日（金）バンバンにて。

麻雀大会

21日（金）雀荘ベイブにて。

（事務局長）